

「栄区九条の会」の学習会で講演した後、世話人会で食事に招かれた。その時、日隈好恵さんから、夫の日隈威徳氏が上梓した『統一協会＝勝共連合とは何か』をくださった。日隈氏は東大の印度哲学梵文学科を卒業し、同大学院修士課程修了した宗教学者である。本書は1984年に出版されたが、統一協会を知る「教科書」であるからと、38年後の今年10月に再刊された。

統一協会は韓国の文鮮明を教祖にして始まった、聖書の言葉を利用した新興宗教である。彼は強い反共産主義を掲げていた。韓国の軍事政権は反共を強力な国家イデオロギーとしていたので、両者は結びつき、互いを利用し合った。統一協会は米国に進出し、反共の政治家や経済人と関係を深め、大きな勢力を築き上げていった。日本においても、右翼の政治家と関り、反共の意識を醸成していった。統一協会の主張を、政策化するために、彼らは、強大な、潤沢な資金を費やし、組織のエネルギーをフル活動させて展開するのが策略である。本書は、その歴史的経緯を克明に調べて報告しているが、その迫力に圧倒された。

潤沢な資金は、日本での靈感商法や常軌を逸した献金などによるもので、家庭崩壊や二世信者の悲劇などを生み出している。私が許せないと思っていることは、罪や悪霊や先祖の因縁などを説き、不安と恐怖を植え付ける脅しによって洗脳し、意のままに動かす人権侵害である。宗教、信仰は喜びや平安が与えられ、生きる勇気と社会に人権と平和を作り出すことに貢献するところにある。不安と恐怖による洗脳は「カルト・狂信的崇拜」であることを知るべきである。決して、心を奪い取られてはならない。

本書を読んで、驚愕したことは聖書を全く勝手に読み替えていることである。エデンの園で、エバが蛇に誘惑され、善悪の実を食べたことは、エバが蛇とセックスし、蛇（サタン）の血が入り、人類に堕落と原罪が始まった。その原罪から、イエスの再来であるメシア・文鮮明と触れ合うことによって、救われる。それが、合同結婚式で行われる「聖酒式」で、「文」が新婦と手を重ね、彼が聖酒を飲み、それを新婦に分け与え、最後に新郎が飲む。この式で、「文」と一体化し、血の交換がなされ、「血分け」が完了し、サタンの血が清められる。読んでいて、頭がクラクラした。こんな勝手な聖書理解を説き、また、それを信じて、行うことの奇妙さに愕然とした。

彼らは、聖書は時代によって変らざるを得ないものであって、聖書は真理を表現する方法の一つで、真理それ自体ではないから、現代人に真理を理解させるために「新しい真理が現れなければならない、その方こそ、即ち、文鮮明である」と説く。そして、統一協会の聖典である『原理講論』には下記のように書いている。「この真理は、あくまで神の啓示をもって、われわれの前に現れなければならないのである。しかるに神は、既にこの地上に、このような人生と宇宙の根本問題を解決されるために、一人の御方を遣わし給うたのである。そのお方こそ、即ち、文鮮明先生である。…先生は単身、霊界と肉界の両方にわたる億万のサタンと闘い、勝利されたのである。そうして、イエスをはじめ、樂園の多くの聖賢達と自由に接し、密かに神と霊と霊交なさることによって、天倫の秘密を明らかにされたのである」。21世紀の今日、通用する文章とは思えないが、この思想がまかり通り、人の心を支配しているのである。不安と虚無に生きている現代人は、理性はなくとも、強力な主張に飢えているのであろうか。あるいは、教育が崩壊し、論理的思考ができなくなっているのであろうか。考えさせられる事態である。